

KUMAMOTO ARTPOLIS NEWS vol.36

熊本駅周辺デザインシンポジウム

全国まちづくり会議2010in熊本
フォーラム「くまもとアートポリス」

くまもとアートポリス構造シンポジウム

くまもとアートポリス現場見学会

宇城市立豊野小中学校改築工事
住民参加ワークショップ

新規プロジェクト

プロジェクト速報

トピックス

第16回くまもとアートポリス推進賞

視察状況

くまもとアートポリス海外巡回展

熊本駅における アートポリス プロジェクト

「熊本駅周辺デザインシンポジウム」～熊本駅におけるアートポリスプロジェクト～が平成22年7月2日に行われた。平成23年3月の九州新幹線開業時の姿が見えてきた熊本駅周辺。シンポジウムに先立ち、四会場に分かれ、大屋根が完成した熊本駅白川口（東口）駅前広場と、周辺設備が進む市電二本木口電停では、プロジェクト設計者やデザイン会議ワーキングリーダーによる現地説明会が行われた。また、熊本駅新幹線口（西口）駅前広場、熊本南警察署熊本駅交番の設計者によるプレゼンテーションも行われ、参加者は各会場を回りながら、熱心に耳を傾けていた。

現地説明会



第一会場
熊本駅白川口（東口）駅前広場プロジェクト
人や車の流れ、軌跡に合わせたカーブを描く、自然な自由曲線を描いた大屋根の特徴について説明がなされ、熊本市街をパノラマ状に見渡せる、公園のような憩いの空間として利用されたいと話す。

西沢 立衛

熊本駅白川口（東口）駅前広場設計者
平成22年、ブリツカー賞受賞



第二会場 市電二本木口電停上屋

自然の木立の中を、市電や人、車が駆け抜けていくイメージで設計された二本木口電停。木立の景のシェルターは、晴れた日には木漏れ陽が光と影のコントラストを演出し、隣接する合同庁舎の庭とのつながりで公園としての一帯感をなす。

田中 智之

デザイン会議ワーキングリーダー
熊本大学工学部准教授



第三会場

「熊本南警察署熊本駅交番プロジェクト」

交番の硬いイメージをやわらげる、優しい作り方をコンセプトに、曲線をつかった穴を開け、透明感をだした外観は、どこから見ても違う街の色が透けて見えるように、夜には行灯のように、遠くからも魅力ある目印となる。

アストリッド・クライン

熊本南警察署
熊本駅交番設計者



第四会場

熊本駅新幹線口（西口）駅前広場

東口駅前広場と違い、ロータリーが大部分を占める西口駅前広場では、サインやシェルターなどの要素を兼ねる壁と屋根による、シンプルな回廊のようなデザインが特徴。周囲の住宅地に合わせ、コースが延長した広場として出合いや、交流の場に。

佐藤 光彦

熊本駅新幹線口（西口）駅前広場 設計者



プレゼンテーション

KUMAMOTO ARTPOLIS NEWS

シンポジウム



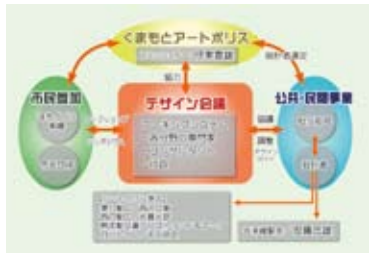
コーディネーター
岸井 隆幸

デザイン会議座長
日本大学理工学部
土木部工学科教授



伊東 豊雄

くまもとアートポリス
コミッショナー
平成22年、
世界文化賞受賞



駅周辺整備に関する相関図



参加者の声

会場を訪れた学生や地元住民の方からは、これからの建築の方向性に関することや西口広場の活用についての質問、完成後の混雑による影響など、様々な声が寄せられていた。



シンポジウムでは、熊本駅周辺の良好な都市空間形成を図るため設けられた「熊本駅周辺都市空間デザイン会議」により進められているデザインの統一性、長期にわたる一貫性を構築し、熊本の特色を活かした「出会いの景」、「木立の景」、「水辺の景」をコンセプトにするプロジェクトの進捗が説明された。続いて意見交換では、海外や全国の例をあげながら、玄関口である駅周辺の都市空間造りが、熊本全体と深くつながるプロジェクトとの認識がなされ、地域の方と共に、新幹線開業という契機に携わる喜びと、アートポリスの空間を通じて全国へ誇れるまちづくりの魁になればと抱負が述べられた。最後に、伊東コミッショナーから、設計者の個性を活かした全国どこにもない雰囲気のある駅前広場ができると思う。自然の中で生きている熊本のすばらしいあたたかい人間性をアートポリスを通じて、外に向かって伝えていきたいと締めくくった。

出演者：(五十音順) アストリッド・クライン・伊東 豊雄・岸井 隆幸・佐藤 光彦・田中 智之・西沢 立衛

「熊本駅周辺から発信するフレッシュインパクト」

毎年、全国から多くの参加を得て各地の「まちづくり」の現状を確認し、再出発の場となっている全国まちづくり会議。10月9日、崇城大学市民ホールにて「新しい公共」をテーマとした「全国まちづくり会議2010in熊本」が行われ、フォーラム「くまもとアートポリス」が開催された。熊本南警察署熊本駅交番、及び白川橋左岸緑地トイレの設計者によるプレゼンテーション、続く「熊本駅周辺から発信するフレッシュインパクト」と題したパネルディスカッションにあたり、地元メディア、公共交通機関、町づくり協議会など各方面の出演者の立場から、アートポリスによる駅周辺事業への活発な意見交換がなされた。



プレゼンテーション

「熊本南警察署熊本駅交番プロジェクト」 アストリッド・クライン (建築家)



「楽しい目印になるような交番に」。その特徴は、ランダムに穴があいた2階のスチールプレートフェンス部分から、内部の虹色が鮮やかに見える、というもの。また、国内外での都市づくりの取り組みを踏まえながら、駅周辺を流れる川を活かしたリバーサイドカフェを提案するなど今後の周辺整備への可能性が示唆された。

パネルディスカッション



COORDINATOR

桂 英昭 建築家
くまもとアートポリスアドバイザー

PANELIST



アストリッド・クライン 建築家
熊本南警察署
熊本駅交番設計者



太田 浩史 建築家
白川橋左岸緑地トイレ
設計者



徳永 龍磨
東B地区まちづくり協議会・
徳永酒店経営



堀 雄二
九州旅客鉄道株式会社
熊本駅長



宮崎 靖大
二本木街創り企画室
企画室長



山森 英雄
熊本朝日放送
報道担当部長

「白川橋左岸緑地トイレプロジェクト」 太田 浩史 (建築家)

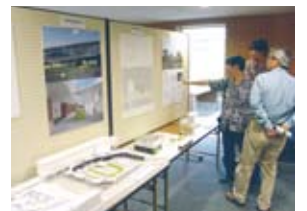


「公共性をいかに文化につなげるか。アクティビティを作り、地域の活動の場にするかが大切」。熊本の水と緑にそったチャーミングな建築が特徴の公衆トイレ。地域の方が訪れ、佇める、白川を見守るような場所にしたという背景には、川が生活に溶け込み、川の活性化に繋がればと、人が訪れる空間を想定している。また都市づくりに触れ、こどもらがダンボールを組み合わせて町をつくるワークショップ等のプロジェクトなどが紹介された。

始めに、コーディネーターの桂アドバイザーより、建築のもつ意味と共に色々な視点でお話いただきたいと挨拶が述べられると、宮崎氏から、新幹線開業を契機に、二本木地区での様々な取り組みが紹介され、続いて、徳永氏より、現在取組んでいる情報交換の場としてのサービス提供や地域活性化の取り組みが述べられた。堀氏からは新幹線開業の進捗状況の説明があり、駅が地域を活性化するため、積極的な地域イベントへの参加、熊本駅の活用などが提案された。全国に向けた熊本の色を出したいとする山森氏は「コンセプト」を大事にし、地域と密着した情報発信でまちづくりを果たしたいと抱負を述べた。また、国内外への熊本のアピール不足や、サインの必要性、地域住民の流出など、都市づくりへ向



けた現状の課題もあげられた。設計者の太田氏は、「建築はお祝いごと」とする視点から、大きな変化が起きることへの不安を共に共有しあい、関係性を築き、解決していく過程自体、幸せなことでもあると述べ、まちづくりに期待を寄せた。それを受け、桂アドバイザーはまちづくりもまた同様で、今までのコミュニティがくずれさった時に新しいものが生まれ、駅と人と地域とメディアが新しい仕組みを作る。その時、不安を乗り越えるようなインパクトがないと受け止められない。そのために意見交換等のまじわりが重要であり、その要素を取り入れつつまちづくりをしていけばどうかと話し、今後の活動を見守って頂きながら、今日の続きをやっていきたいと締めくくった。



「熊本駅白川口(東口)駅前広場の 大屋根における建築デザインと 構造のコラボレーション」

平成22年11月13日、熊本市青年会館ホールで構造シンポジウムが開催された。プレストレストコンクリートが採用された熊本駅白川口(東口)駅前広場大屋根のデザインと構造のコラボに関する講演や意見交換に、出席者は熱心に耳を傾けた。



講演「21世紀のPC建築」



鈴木 計夫

大阪大学名誉教授
NPO法人PC建築技術支援センター理事長
入っても復元できるところがプレストレストコンクリートのすばさ。これからは、建築の舞台の中心となってくるはず」と、その可能性に対する大きな期待を語った。

まずは、50年に渡ってプレストレストコンクリート(PC)構造の研究と講義に携わってきた鈴木氏が講演。売って儲けるためではなく、社会に求められるものを創造しなければならないとし、「これからの建築物に求められるのは耐震性・耐久性・利便性。そういった視点で、今後プレストレストコンクリートは社会に必要とされるものである」と述べた。「荷重をかけて亀裂が入っても復元できるところがプレストレストコンクリートのすばさ。これからは、建築の舞台の中心となってくるはず」と、その可能性に対する大きな期待を語った。

プレゼンテーション

設計者の西沢氏は、デザインについて、「そこを目的に人が訪れる憩いの公園をイメージ。遮蔽物がなく、駅に降り立った人が水平方向のパノラマを体験できる」とし、屋根のコンクリートについて、薄くすることで透明感を持たせたと説明。構造担当のバーデン氏は、「コンクリートはひび割れて水が入り、鉄筋が腐るなどの問題があるが、プレストレストコンクリートなら耐久性とメンテナンスの面から適切と考えた」と語った。

西沢 立衛

建築家
熊本駅白川口(東口)駅前広場設計者

アラン・バーデン

構造家
熊本駅白川口(東口)駅前広場構造設計者



パネルディスカッション

「意匠と構造のコラボレーションによるデザインの可能性」



末廣 香織 建築家
くまもとアートポリス
アドバイザー



PANELIST



アラン・バーデン



徐 光
建築家 構造家



鈴木 計夫



西沢 立衛



三井 宜之 熊本大学名誉教授
熊本駅白川口(東口)駅前広場
上屋構造評価委員会委員長



きわめてシンプルなデザインが特徴の、熊本駅東口大屋根の構造について、不安定な建造物にならないよう、非常に強固な柱埋め込み式になっている点を三井氏が説明。徐光氏は、プレストレストコンクリートを活用した様々な建築物の例を紹介しながら、東口大屋根に関しては、プレストレストコンクリートをうまく活用しており、大スパンの床板に対する長期のたわみだけでなく、直下地震に対しても考慮された構造との感想を述べた。

続いてコーディネーターの末廣アドバイザーが西沢氏へ、「イメージを最後まで追究する確固たるこだわり」について尋ねると、「おもしろい案があれば、最初のイメージと違っていくこともある。造り方を考えることでより創造的になる」と答え、バーデン氏も、「空間操作の建築家と、力の流れや経済性を考えるエンジニアは目指すものが違う。そこが

コラボすることに意味がある」と語った。

「大屋根のデザインはすっきりしていて爽快。プレストレストコンクリートが採用され、全国的にも非常にいいモデルとなった」と感想を述べたのは鈴木氏。最後にコーディネーターの末廣アドバイザーが、



「構造技術、施工技術、建築デザインが結びついてきた1960年代のような時代がまた来ていると感じる。このようなシンポジウムをきっかけに意匠設計者は構造に、構造設計者はデザインに、積極的にかかわってもらいたい」と締めくくった。

「宇土市立宇土小学校」

斬新なアイデアと構造に感嘆する

平成22年12月12日、くまもとアートポリス建築塾「宇土市立宇土小学校・網津小学校現場見学会」を開催。見学前に各設計担当者・構造担当者のプレゼンテーションを聞いた後、デザインや構造を現場で目の当たりにした参加者からは、斬新なアイデアの数々に驚きの声が上がっていた。

宇土小学校見学会プレゼンテーション



小嶋 一浩 建築家
宇土市立宇土小学校
設計者



赤松 佳珠子 建築家
宇土市立宇土小学校
設計者



新谷 真人 構造家
宇土市立宇土小学校
構造設計者

“ワンルーム”空間を実現したL型壁



プロポーザル提出から、丸3年宇土に通い続けている小嶋氏と赤松氏。「建築は“もの”ではなく、“できごと”を創造する作業。学校生活を送る子どもたちのアクティビティを、どうサポートできるのかを考えることが大事」と語る小嶋氏に対し、子どもたちにとって、



学内にとどまらないあらゆることが勉強であるとする赤松氏も、「学内での自由な行動に加え、地域の人たちが積極的に学校に入ってこられる空間づくりを目指した」と語った。

両氏の考える、学内の活発な行動と学外との交流を実現するために取り入れられたのが「L型壁」。これによって、教室としてゆるやかに区切られながらも、中庭を孕んで広がるワンルーム空間が実現した。天井高いっぱいに関閉できる折戸も設けられ、冬以外はすべて開け放たれる空間となっているのが大きな特徴である。

これに対し構造設計を担当した新谷氏は、「柱と梁が建物を強くすると思われがちだが、地震に対しては壁のほうが強い。斬新なL型壁だが、構造的には大変安全性が高いと言える」と説明。また、スラブコンクリートに球形ポイドを埋め込むことで軽くし、耐震構造に寄与していると語った。



宇土小学校見学会



参加者らは実際の「L型壁」や、スラブに埋め込まれるという球形ポイドなどを見学。「L型壁」がそのまま構造体となる設計に興味深い。足場がなくなった状態で再度見学したいという声が聞かれた。

新校舎に埋め込む夢や思い



資料提供:CAT

平成23年3月3日、宇土市立宇土小学校の建て替え工事が進む新校舎に、将来の夢や新旧校舎に対する思いなどを書いたポイド(直径約30cmの発泡スチロールの球体)約1000個を埋め込むイベントが開催された。

新校舎では、建物自体を軽くして地震に強い構造とするために、ポイドスラブ工法を採用しており、ポイドをコンクリートの床の中に校舎全体で3万個ほど埋め込むことになっている。

事前に児童に渡されていたポイドには、「将来サッカー選手になる」、「宇土小大好き」、など、夢や思いが自由に書かれていた。

6年生の児童代表がスタッフにサポートされながら工事現場へ入り、思いを込めたポイドを鉄筋の間に埋め込んだ。旧校舎から見守る在校生は最後まで代表児童に対して大きな声援を送っており、校舎完成前に卒業する6年生にとっても新校舎との思い出が刻まれたイベントとなった。



▲ポイドを埋め込む
6年生の児童代表



▲同じポイドを持って
声援を送る子どもたち



▲埋め込まれたポイド



▲最後は、一緒にポイド入れを行った宇土市教育長らと一緒に喜ぶ児童たち



宇土小学校 進捗状況

資料提供:CAT



●早い工区では天井仕上げの吹付けが終了し、開口部のガラス取付けが進んでいる(平成23年3月中旬時点)。平成23年7月竣工予定。

網津小学校現場見学会」

網津小学校見学会プレゼンテーション



坂本 一成 建築家
宇土市立網津小学校設計者



金箱 温春 構造家
宇土市立網津小学校構造設計者

連続したヴォールト屋根が生む開放空間

三方を山に囲まれ、島原湾に向かう平地部の、非常に恵まれた環境に立地する網津小学校。市民グラウンドや宇土市役所網津支所などと隣接し、地域の中心的な場所となっている。「この地の利を活かし、子どもたちがのびのびと学ぶ豊かな小学校にしたいと、開放的な校舎を考えた」と坂本氏。そのデザインの大きな特徴の一つが、連続したヴォールト屋根である。設計図や写真等をもとに説明した坂本氏は、「大きな屋根の下で学び、庇の下や縁側スペースで元気に遊ぶ子どもたち、さらには、一緒に活動する先生や交流する地域の方々も思い浮かべて設計した。見学会で、非常に開放的な建物だということが分かるはず」と語った。

「坂本氏のデザインは、非常に開放的なことが特徴的。柱はあるが梁がないという構成や、高さがずれているヴォールト屋根への対応に力を注いだ」と語ったのは構造設計担当の金箱氏。一部にフラットな部分を取り入れたラーメン構造を採用するなどの検討を重ね、最終案にたどり着いたと説明。力学的な説明も加え、非常に興味深い建物になったと締めくくった。



網津小学校見学会



参加者らは、ヴォールト屋根の梁のない天井や、屋根が少しずつずれていることで、外の光が差し込む構造になっていること等を見学。「難しい構造上の課題をうまく解決している」という感想が聞かれた。



網津小学校 完成!

この地域の豊かな田園風景に溶け込むような、連続したヴォールト(アーチ状の曲面)の屋根。設計者の坂本一成氏(アトリエ・アンド・アイ)は、「大きな庇の家」というテーマで、子どもたちに優しく暖かみのある学校とし、子どもたちが元気に多様な活動ができる空間をめざした。

平成23年3月、宇土市立網津小学校完成。



ガラスの欄間から光が入り込み、明るく開放的な教室。

白川橋左岸緑地トイレ こどもワークショップ「白川トイレの樹木をつくろう」



▲太田氏によるプレゼンテーション



▲ツリー状のパーツを組み立てるワークショップ



こどもたちが組み立てたのは左図の赤い部分

平成23年2月16日、熊本市立向山小学校の6年生全員を対象にワークショップが開かれた。

児童たちは、アートポリスに関することや熊本駅周辺の今後の移りかわりについて説明する県の担当者の話を熱心に聞き、設計者の太田浩史氏は、みなさんに将来にわたって大切に利用してもらいたい、と思いを伝えた。

また、児童の代表はツリー状のパーツをひとつひとつ組み立てる工事の一部を体験した。その後全員で現場へ移動し、実際にツリーをトイレの屋根にクレーンを使って取り付ける作業を見学。児童からは「温かい便座はついているの？」など質問が挙がった。



▲現場でのツリー取り付け見学



▲こどもたちからは質問が飛び交った

第4回宇城市立豊野小中学校住民参加ワークショップ「みんなで見守ろう豊野の子どもたち」

平成22年7月4日豊野小学校の体育館で、子どもと共に地域について議論し、その中で学校の役割を考えることによって、地域に根ざした新しい学校運営へ反映していくことを目的としたワークショップが開かれた。

これまでのワークショップで挙げた意見や、子ども、保護者等に書いていただいた「期待の木・不安の木」、学校の先生方との打ち合わせをもとに、新しい校舎のかたちが出来上がり参加者にお披露目された。

新しい学校の基本設計の説明

設計者の小泉 雅生氏(小泉アトリエ)から、新しい学校のプランについて説明があった後、大きな平面図の上を実際に歩いて、新しい学校について紹介がされ「学校で料理教室があれば利用したいか」、「学校でサークル活動をしているか」などの具体的な質問に参加者は〇×の札を掲げて意見交換がされた。学校を地域に広く開放し、どのように活用していきたいかの問いに対して「学校給食で子供がお気に入りのメニューを習える料理教室を開いてほしい」、「大人から子供に竹馬づくりなどを教えてはどうか」などの声があがった。



住んでいる地域ごとに6グループに分かれ、近所の自慢できるところ、おもしろいところ、危険なところなどをカラフルな旗に書いて、互いに紹介があった。



熊本駅周辺のくまもとアートポリスプロジェクト、いよいよ完成!



白川橋左岸緑地トイレ

白川で起きる出来事を
地域の人々が見守れるような拠点
風景が息づくような、ほっとするトイレ

平成23年3月完成。
設計:太田 浩史氏
(デザインヌーブ)



熊本駅新幹線口(西口)駅前広場

大きな穴のあいた
スクリーンとルーフで覆われた
半屋外の公園のような駅前広場

平成23年3月完成。
設計:佐藤 光彦氏
(佐藤光彦建築設計事務所)



熊本南警察署熊本駅交番

緑と水とにぎわいが
グラデーションの色彩からにじみ出る
ランドマークとなる交番

平成23年3月完成。
設計:アストリッド・クライン氏
+マーク・ダイサム氏
(クライン・ダイサム・アーキテクト)

熊本駅白川口(東口)駅前広場

市電やバスなどの交通機能の流れに沿い
利用者を強い日差しや大雨から守る
やわらかな雲形のおおらかな屋根

平成23年3月、暫定形完成。
設計:西沢 立衛氏
(西沢立衛建築設計事務所)



けんちく寿プロジェクト —「北署」の二十歳を祝う見学会と座談会—

建築が話題になるのは竣工時。次は取り壊しや建て替えの時ということも少なくない。見過ごされがちな建築の現役時代。

建築の成長過程に目を向けて、建築の経年を人生に例え、歳を重ねてきた節目を祝おうと、地元の間の方が中心となって「けんちく寿プロジェクト」を立ち上げた。

第一回は、平成22年12月4日に開催。1990年11月に竣工し、今年で二十歳を迎えた「熊本北警察署」をお祝いした。主催のけんちく寿プロジェクトとともに熊本県も共催。執務室やパトカー等が並ぶ地下駐車場など、普段見る機会のない場所を見学できる「見学会」と建設当時設計や工事に携わっていた関係者による「座談会」の二部構成。併せて、当時の関係者やイベントに参加した方が北署への想いをこめたお祝いメッセージボードを北署に贈呈するセレモニー等が行われた。



▲1時間かけてじっくり見学してまわった参加者

設計者:篠原 一男氏のひ孫さん
からもイラストが寄せられた。▼



お祝メッセージボード



座談会

熊本県立球磨工業高校管理棟 改築設計競技最優秀賞決定!

最優秀賞



2011年3月2日、球磨工業高校体育館で、「熊本県立球磨工業高校管理棟改築設計競技」の第2次審査が行われた。全国から応募された51件の設計案のうち、第1次審査を通った5作品が参加。画像を駆使した情熱あるプレゼンテーションに、審査員はもちろん、出席した球磨工業高校の生徒たちも熱心に耳を傾けた。審査の結果、最優秀賞にワークステーション+モードフロンティア+萩嶺一級建築士事務所、その他優秀賞1作品、佳作3作品が選ばれ、表彰式が行われた。

プレゼンテーション

ワークステーション+モードフロンティア+萩嶺一級建築士事務所

奥へと人を誘う「木の洞窟」

コンセプトは「木の洞窟」。森林資源を活用し、“ともに活用できる場”を目指した。林立する、地元産の木を束ねた壁は、視線を遮ると同時に、奥へ奥へと人を誘う。壁柱全体を大きな屋根根と連携させ、安定したフレームを形成することで、あちこちに向いた壁はお互いに助け合い、剛性の高い大きな空間を構成する。外観も、地元の森林資源を使った大きな木の壁につながり、球磨工業高校の顔となって人々を出迎える。



講評



審査員長 伊東 豊雄
くまもとアートポリス
コミッショナー

★最優秀賞作品について

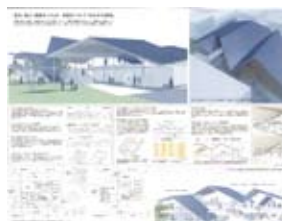
ワークステーションをはじめとする皆さんの案が最優秀賞に決定した最大の理由は、建築としての圧倒的な力強さ。120度で三角に折れる壁は、平面上に三角形の空間がたくさんできることになり、これがさまざまな問題を起こすのではないかとも思われるが、それをカバーするほどのパワフルな魅力に、山田校長先生も理解を示して頂いた。

優秀賞



TNA

佳作



竹内申一



ヤクジ建築デザイン事務所+
BIN+明野設備研究所+
ユニットナネ 設計共同体



荻原雅史・中西ひろむ

球磨工業高校教職員・生徒による投票



球磨工業高校では、応募作品51点すべてを学校の掲示板に貼りだし、二次審査を前に教職員・生徒全員による投票が行われた。



その後第1次審査を通過した5作品には赤い花、生徒による投票の結果トップ5となった5作品には黄色い花が飾られた。

第16回くまもとアートポリス推進賞

推進賞



【道と暮らす家】

推進賞選賞



【C-HOUSE】富重清治



【百年遺伝子の門】永石秀彦



【天草文化交流館】



【芦北町立佐敷小学校】



【T-house in 高森】

平成22年度の推進賞は、現地審査や最終選考を経て、推進賞2作品、推進賞選賞4作品に決定した。応募作品は51点にもなり、伝統的建築の修復した作品や現代的作品など特徴はさまざまであった。また、応募は県内のみならず県外からも寄せられ、「くまもとアートポリス推進賞」の浸透が伺えると審査員から評価された。



現地審査の様子



視察状況

近年、多くの観光客がくまもとアートポリスプロジェクトを訪れており、今年度は海外だけで約450名が視察した。

それに加え、今年度は「出前講座」で地元の小学生が住む地域にあるプロジェクトを紹介したり、現在工事進行中のプロジェクトを設計者から説明するなどの機会を設けた結果、事務局が対応しただけで国内外約1350名の方にアートポリスに触れていただいた。

また、韓国のKBS光州放送総局やKBS浦項放送局にも取り上げられ、さらに海外での認知度が高まっている。



韓国・KBS光州放送総局による取材風景。県立美術館分館や、工事が進む熊本駅周辺プロジェクトなど、熊本市内の4箇所取材が行われた。

熊本市立帯山西小学校的「出前講座」。6年生と教員合わせて122名で、小学校の近所にある県営保田窪第一団地を見学した。

くまもとアートポリス海外巡回展（国際交流基金主催）

日本の伝統や文化などを海外に紹介するために国際交流基金が開催している海外巡回展。2003年からはくまもとアートポリスもそのひとつとして取り上げられており、昨年度末までに24都市48カ国で開催されてきた。今年度は、チュニジア、イタリア、ドイツなど、3カ国5都市で開催され、アートポリスの国際的評価と認知度がさらに高まっている。



ドイツ・ケルン日本文化会館にて



資料提供：国際交流基金

2003年	ブラジル、米国（2カ国、4都市）
2004年	米国、アルゼンチン、ポリビア、ニカラグア、ホンジュラス（5カ国、7都市）
2005年	コスタリカ、カナダ、米国、ベネズエラ（4カ国、7都市）
2006年	カナダ、マレーシア、モンゴル、ネパール（4カ国、5都市）
2007年	ベトナム、韓国、インド、ニュージーランド（4カ国、11都市）
2008年	ニュージーランド、オーストラリア、スリランカ、トルコ、イエメン（5カ国、9都市）
2009年	ポルトガル、リトアニア、ロシア、レバノン（4カ国、5都市）
2010年	チュニジア、イタリア、ドイツ（3カ国、5都市）

※国際交流基金は、文化交流の促進を通じて日本と諸外国との相互理解を深めるため、外務省所管の特殊法人として1972年に設立され、2003年から独立行政法人となった財団。



KUMAMOTO ARTPOLIS NEWS vol.36



発行
くまもとアートポリス事務局（熊本県土木部建築課内）
〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1
TEL096-333-2537 FAX096-384-9820
kenchiku@pref.kumamoto.lg.jp
<http://www.pref.kumamoto.jp/site/artpolis/>

22 土 建

③ 003